

社会人基礎力と就業力の育成

Training of basic ability to work in society and the power of career

小 磯 重 隆*

Shigetaka KOISO

〈要旨〉

社会人基礎力は“職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力”として「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という“3つの力”と12の能力要素からなる概念である。近年、「参加型授業」がこの社会人基礎力を高めると注目されている。本学21世紀教育テーマ科目「社会と私－コミュニケーション力」での参加型授業内容を紹介することを通じ、学生の就業力育成について考察した。

12の能力要素の内、主体性、働きかけ力、傾聴力、柔軟性、課題発見能力、発信力の向上が感じられた。これらの要素は「前に踏み出す力」と「チームで働く力」に影響を与えるものとする。参加型授業を通じた社会人基礎力の育成が、「基礎学力」や「専門知識」修得の意欲につながり、さらにゼミや研究室で本格的に参加型授業が行われ、専門知識を学んだ上で就業力の育成につながることを望ましいと考えられる。

キーワード：社会人基礎力、参加型授業、就業力の育成、キャリア教育

〈はじめに〉

経済産業省が、平成18年「社会人基礎力」の概念を発表した。産学の有識者を集めて「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として3つの能力（12の能力要素）からなる、この社会人基礎力を提唱し、将来の若者を育成しようと呼びかけている。社会で働くためには「基礎学力」や「専門知識」が必要である。また、「人間性、基本的な生活習慣」は全ての活動の基盤になる。「社会人基礎力」はこれらの要素と重なり合い、相互に作用しながら共に成長していくものである。この基礎力をいつ誰が育てるべきであろうか。初等教育、中等教育はもちろんのこと、地域や家庭が担うべきものは大きい。特に、本格的に仕事を始める前の大学時代は「社会人基礎力」を育成する大切な時期と言える。

大学設置基準の一部が改正され、平成23年4月1日施行となった。各大学における教育課程の内外を通じた社会的・職業的自立に関する指導等への取り組みが必要となっている。学生の卒業後の自立のために、教育や学生支援が行われるよう、全学的な実施体制の下、学生の就業力育成に係る取り組みが展開される環境の整備を求めているのである。

若者の就業力育成は「社会人基礎力」の概念を含む幅広いものであると考えられるが、基礎力で重要な整理がなされていると言える。大学において社会人基礎力を育成する意義は大きいですが、教育の現場で

*弘前大学学生就職支援センター
Hirosaki University Student Career Center

どのような取り組みをすればよいのかが課題になる。ひとつのアプローチとして、近年、「参加型授業」が基礎力を高めると注目されている。本学21世紀教育テーマ科目「社会と私-コミュニケーション力」は参加型授業として演習を中心に開講されている。社会人基礎力育成の目的では構成されていないが、この授業を通じて、学生の就業力が育成され得ることを実感している。本稿では本学21世紀教育テーマ科目「社会と私-コミュニケーション力」での参加型授業を紹介するとともに、学生の就業力育成について考察する。

1. 「社会人基礎力」とは

社会人基礎力は「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という“3つの力”と、それらを構成する「主体性」「課題発見能力」「発信力」といった12の能力要素からなる概念である。“職場や地域で活躍する上で必要となる能力”として、「基礎学力」や「専門知識」、「人間性・基本的な生活習慣」とともに相互に作用しながら共に成長していくものである。社会人基礎力のみを単独に高めるというものではなく、よい経験や活動をすることで他の要素と循環的に向上するものと考えられている。

「前に踏み出す力」は、意欲・やる気に大きく関わるものである。主体性、働きかけ力、実行力の能力要素があり、目標達成や粘り強さ、自己理解や他者への共感など、人の能動的行動に関する領域をつかさどる力である。最近の若者は自信の無さから踏み出すことを躊躇することが多いと言われる。“やる気を出させ目標を達成する”ために重要な力であり、意欲的に大学の学びに取り組むよう学生を変える要素でもある。

「考え抜く力」は、知識を活用し、解決するためのものである。課題発見力、計画力、創造力の能力要素があり、現在の状況と目標状況から問題を理解すること、知識や情報を論理的に組み立てていくこと、解決に向けたプロセス、知識の再構成や独自の解釈など、人が人である「考える」ことをつかさどる力である。考える上で、大学で学ぶ基礎学力や専門知識が重要となることは言うまでもない。自らの仮説を立て、解決策を考えることも求められる。

「チームで働く力」は、よい人間関係を構築していく力、社会の中で自分を活かし協働するためのものである。発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の能力要素がある。ある特定の集団でチームワークやコミュニケーションを持つだけでなく、社会の中で、異なる立場・考え方の人も共感・協調し、自分の意思を伝えることのほか、耐える力も含め、人が社会で協働することをつかさどる力である。

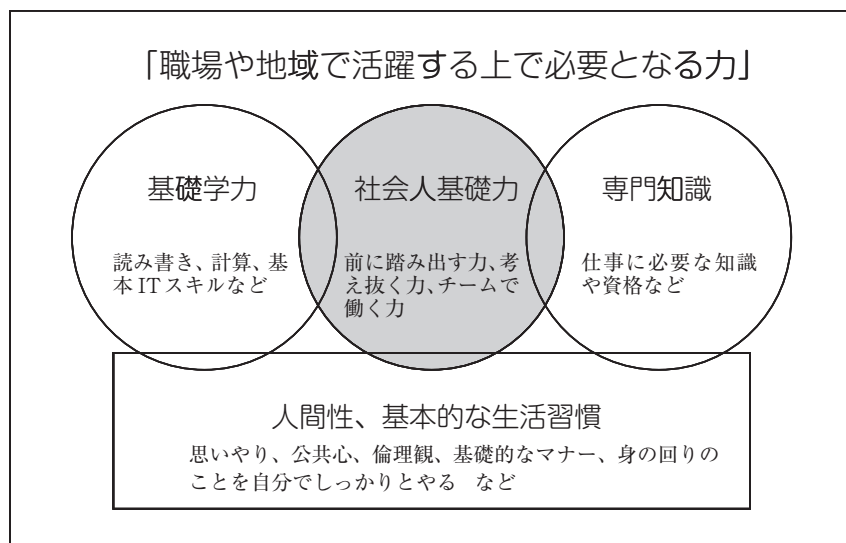


図1 職場や地域で活躍する上で必要となる力

社会人基礎力として述べられる3つの力12の能力要素は、分かりやすく、焦点を絞り、育成や評価の指標として活用できるよう具体的なキーワードとして表現されたものである。実は従来から、当たり前と言われていた力や能力とも言えるだろう。若者の学力が低下したとか意欲がなくなったと言われて久しいが、必要とされる力や能力を顕在化したものであり、「見える化」とも呼ばれる。また若者を取り巻く産業界の変化も大きい。若者に求められる仕事レベルが高度化しているのである。正社員として採用する新人には、早い時期から、意欲的に自分で行動し、人と連携して業務をこなす能力が求められている。若者を取り巻く環境も、昔以上に社会人基礎力の育成を求めているのである。

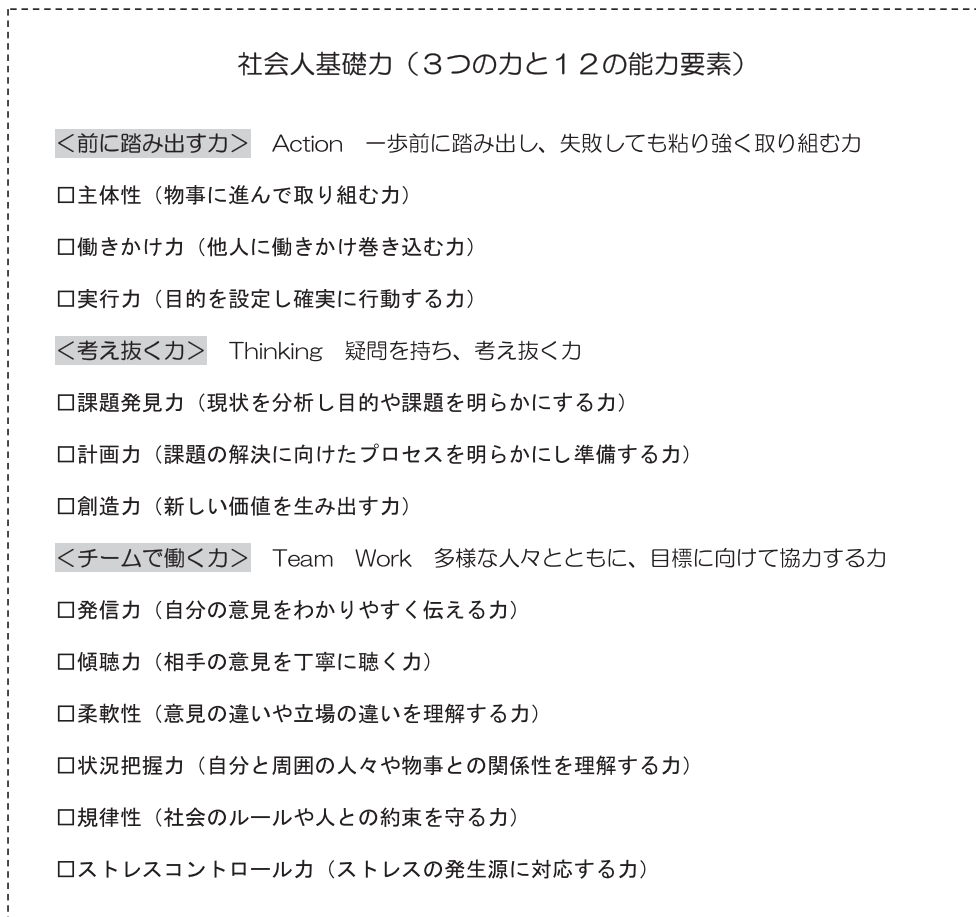


図2 社会人基礎力（3つの力と12の能力要素）

2. 大学での育成に期待されること

社会人基礎力をいつ誰が育てるべきであろうか。初等教育、中等教育はもちろんのこと、地域や家庭が担うべきものは大きい。特に、若者が社会に出る前（仕事を始める前）の大学時代は「社会人基礎力」を育成する大切な時期と言われる。大学生活の中の、授業やゼミ・研究室、インターンシップやボランティア、クラブ・サークル、アルバイト、学園祭など、色々な場面で社会人基礎力は育成されるものと思われる。学生と日々接する教員にとっても“職場や地域で活躍する上で必要になる能力”を持った学生を育成すること、社会に出ることを見据えた教育を行うことは重要であろう。

前述した通り、社会人基礎力の育成は「基礎学力」や「専門知識」の育成と別々に行われるものではない。社会人基礎力の向上が「基礎学力」や「専門知識」修得の意欲につながり、相互に作用しながら共に成長していくものなのである。

「社会人基礎力」を高めるなら、それはどのような授業方法なのか。「社会人基礎力」に関する研究会の座長を歴任した法政大学の諏訪康雄教授は、同大の学生を対象にした調査から、参加・問題解決・知識活用型の授業を進めるゼミでの活動・経験が「社会人基礎力」を高めることに注目している。部活やサークル、アルバイトでも社会人基礎力は育成されると考えられるが、これ以上の成長感を、参加型や問題解決型の授業等で学生は感じているという。

ではそもそも、社会人基礎力とはどのように育つものなのだろうか。経済産業省「社会人基礎力育成の手引き」によると「経験が人の内部で構造化し、社会人基礎力を向上させ、人を成長させる」とある。“内的な経験知が構造化される”ことがポイントである。社会人基礎力は「行動様式」や「思考様式」とも言い換えることができるが、「人は行動や思考を通じて外界と対話し、生きていることを実感し、生活の中で経験を重ね、多くは自然に、それら様式を身に付けてきた」と説明されている。繰り返し意識化されることで、より安定したものになり、また自らが用いる様式と異なるものが、ある問題に有効であった場合に、新しい様式を学ぶものなのだとしている。この「気づき」が、獲得した新たな様式を次の問題に試すことを促進し、そうしているうちに、新しい様式も習得され、こうした中で発現される個性は、より成熟したものになっていく。外界や他者との関わり合いが生きていることの実感となり、その実感こそが行動様式・思考様式ひいては「社会人基礎力」を定着させていくと説明している。つまり、さまざまな課題や場面や状況を経験して、その中で得られる満足感や達成感を通して育まれるものなのである。

大学での育成において、クラブ・サークルやインターンシップなどの支援も重要である。教育の面では「知識伝達型授業」のほかに、課題を見つけたり、解決方法を考え、実行したり、グループで話合ったり、協力して問題を処理したりする体験型の学習が社会人基礎力の育成に強く求められているといえる。体験型の学習や課題解決型の学習なども含み、これらを「参加型授業」と呼ぶことにする。

既に実施している教育機関での社会人基礎力育成場面	
●小中学校・高校では	各科目における育成評価の観点（関心、意欲、態度／思考、判断…） 体験学習、職場体験学習、特別活動、総合的学習の時間、 社会見学、就学旅行、部活動、ボランティア活動など
●大学・短大、高専、大学院では	ゼミ、グループワーク形式の授業、調査・実習、発表重視の授業、 プロジェクト形式の課題解決型学習、インターンシップ、研究室、 クラブ・サークル、アルバイト、文化祭、ボランティア活動、 就職活動など
（「社会人基礎力育成の手引き」経済産業省 より）	

図3 既に実施している教育機関での社会人基礎力育成場面

3. 基礎教育における参加型授業の試み

21世紀教育テーマ科目「社会と私ーコミュニケーション力」は、いわゆるキャリア教育科目のひとつとして、社会で必要となるコミュニケーション力について実習・演習を通じて体験的に学び、自分の進路を歩むための力を習得する目的で開講されている。考え抜く力、協力する力、前に踏み出す力を身に付け、自分の考えをまとめ、示すことも学ぶ。演習中心の授業であり、教材の制約もあるため履修人数を30名までとしているが、多くの履修希望があり、昨年度から同一授業内容で後期に2回開講している。

科目本来の目的があるため、全体ではなく、一部で「社会人基礎力」育成を意識した授業を行っている。ここでは授業の内容を紹介し、参加型授業が社会人基礎力につながるものか所感を述べたい。

1) 授業の概要

履修人数は約30名で、1・2年生を中心に5学部（人文・理工・教育・医学・農学生命科学）の学生が集まっている。また、数名の留学生も参加している。ほぼ毎回、グループ形式で授業が進み、このグループもテーマ毎にメンバー員は変更される。授業の準備として、教材のほかに、学生各自の「名札づくり」も手間のかかる仕事だが、グループ変更毎に作り直している。グループは「色別」に分れており、名札の紐がちょうどその「色」にもなっている。

ガイダンスの後、まず「ブレインストーミング」の内容で、意見をたくさん出すトレーニングを行う。一人でアイデアを出すより、チームで意見を出し合うことで、相互啓発されることが多いことを学んでもらいたいと考えている。続いて、簡単なテーマで「話し合い」を行い、司会・進行役（ファシリテーター）を交代で全員に体験してもらう。次に、少しじっくりと、グループディスカッション（集団討議）を行っている。近年、就職活動の採用試験においてもグループディスカッションを試験として課す企業が多くなっているためか、苦手な学生にも取り組む姿勢が見られる。数回の討議を見ていると、ディスカッションが上手になっていると実感できる。良い結論を得ることよりも、良い話し合いができるように成長している。例えば、単純なことだが、相手の意見に「あいづちを打つ」ことなどである。

(抜粋) 社会と私ーコミュニケーション力 (D①)

1. 授業の概要・目的

社会で必要となるコミュニケーション力について知り、実習・演習を通じて体験的に学び、自分の進路を歩むための力を習得します。特にグループディスカッション、グループワークは参加者の相互啓発を期待しています。自分の将来への適切な展望と職業意識を持てるように学びます。

考え抜く力、協力する力、前に踏み出す力を身に付けること。自分の考えをまとめ、示すことを学びます。

2. 開講時間・場所

火曜日／7～8時限(14:20～15:50)

総合「309講義室」

3. 授業の展開

第1回目	—	ガイダンス
第2回目	}	1. コミュニケーション力を知る 社会人基礎力（考え抜く力・強力する力・前に踏み出す力） リーダーシップとコミュニケーション、発想法、ブレインストーミング ミニ討議とミニゲーム
第3回目		
第4回目		
第5回目		
第6回目		
第7回目	}	2. グループディスカッション グループディスカッションの方法、構成的グループエンカウンター テーマに関するグループ討議（3週を通じて役割分担を変え実施）
第8回目		
第9回目		
第10回目	}	3. グループワーク グループで課題を達成する作業演習 （3週を通じ、課題を見つけて改善対策し、実行する） 各自の役割を決め、チームワークで課題を遂行する
第11回目		
第12回目		
第13回目		
第14回目	}	4. コミュニケーション力を活用する コミュニケーションに関する自分の強みと弱み 他グループのディスカッションを評価する
第15回目		
第16回目	—	試験

図4 シラバス (抜粋) 社会と私ーコミュニケーション力

グループワークでは「作業を実施」する。課題は紙模型の作成で、「設計試作」をグループで検討し、「量産体制」を考え、実際にグループで「生産・加工」を行い納品してもらう。何が課題・問題であるか考え、その問題を解決する方法を考え、話し合い、協力して実行することでカリキュラムが進む。90分×16回開講（2単位）の中で、他グループのディスカッションを評価する内容も体験し、最後はコミュニケーション力に関する考え方を問う試験を実施している。



図5 グループディスカッション：青森の観光について話し合う学生。

2) 事例（グループワークの具体的な展開）

授業内容の内、事例としてグループワークを紹介したい。課題は紙模型の作成である。A3画用紙を材料に、底辺8cm×稜線7.5cmのピラミッドを作る。個人の文具品は使用禁止で、与えられた工具（定規、コンパス、カッター、下敷き、消しゴムなど）の中で量産を念頭に「設計・試作」し、メンバーで役割を決め、「生産・加工」する。3週（90分×3回）の中で、1週目は試作、2週目は第一回目の量産、3週目は改善を検討した上で第二回目の量産を行う。

試作では、理工学部の学生が活躍し、基本設計を行うことが多い。出題者から見て不必要と思われる三角関数や $\sqrt{\quad}$ （ルート）計算を一生懸命行うグループを見て微笑ましく感じる。今回は、名札に学部の記載を無くしてみた。すると学部にとらわれず、文系の女性が設計の意見をより多く出したり、誰かに任せただけではなく、皆で検討したりする。授業の進め方の違いで大きな変化があることを感じた。

第一回目量産では、決められた出荷個数を納められたグループと、結局数個しか納品できなかったグループと様々である。チーム全員が忙しく働くグループと、働こうと思っても前工程から仕事が流れずに手待ちになり、バランスの悪いグループとが見られる。各チームはひとつの会社になっており、納品した紙ピラミッドの個数と品質で会計決算も行う。黒字の会社はお金もあり、次の設備投資（工具の追加）に意欲も出て、ひとつの達成感が得られるようである。

第二回目量産では、前回の反省と改善を行い、実施する。設計そのものから修正するグループもあるが、設計の問題を加工の工夫で修正するグループもある。各自の仕事もチームワークを持ち、バランスを考えて配分することが多い。前回失敗したグループも、改善した内容が上手くできると、満足感を得られている。

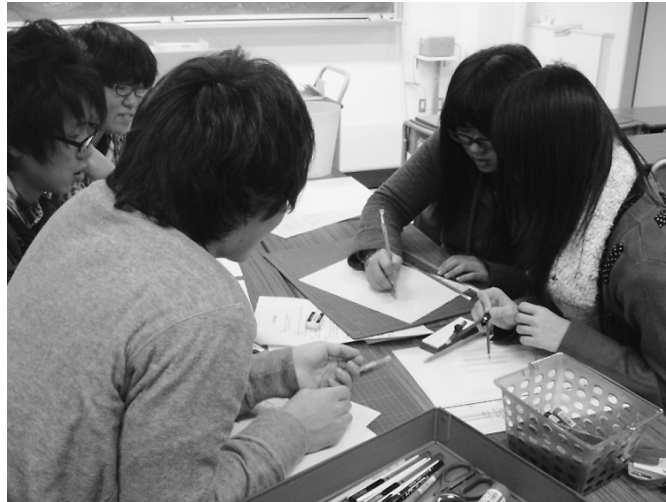


図6 グループワーク①：試作品の設計案を検討。具体的に1個作ってみる。



図7 グループワーク②：
ピラミッドの生産をグループで実施。

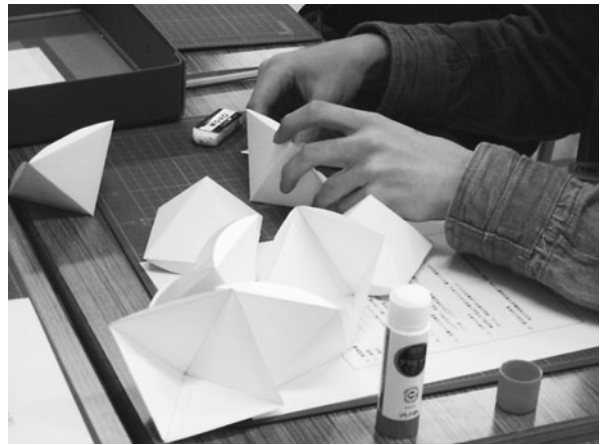


図8 グループワーク③：
ひとつひとつ丁寧に加工する。

3) この授業を通じて

授業開始当初はグループでの活動も進行役や書記をジャンケンで決めたり、指名されないと発言しない学生も見受けられた。自己紹介の時間を取っても、学部と名前を言うだけで、どうして良いかわからず、躊躇している様子であった。

授業が進むと、意外なことだが、「主体性」がはじめに現れる。グループの誰かが、物事に進んで取り組むのである。そして他の者が真似をしていく。「傾聴力」は簡単なようで少し時間がかかる。「聞く」と「聴く」の違いである。誰かの発言を聞くのではなく、聴く態度で迎えるようになる。自分の意見を言う「発信力」もついてくる。はじめは、各自バラバラな発信力が、しだいに「働きかけ力」や「柔軟性」につながっていった。何が課題なのかを自分で見つける「課題発見能力」は難しい。見つけた課題が真の課題ではない場合も多い。しかし、自分自身で課題を見つけ、解決策を考えることは、短いグループワークの中でも十分に達成できている。少なくとも12の能力要素の内、主体性、働きかけ力、傾聴力、柔軟性、課題発見能力、発信力の向上が感じられた。「実行力」や「創造力」、「状況把握力」などは、短い授業時間のカリキュラムの中で行うため、成長が実感できるまでには至っていない。今回の授業内容から向上が感じられる能力要素は、特に「前に踏み出す力」と「チームで働く力」に影響を与えるものであると考えられる。

4. 考察とまとめ

コミュニケーション力を育成する授業の中で、社会人基礎力の育成も意識した展開を行ってみた。コミュニケーション力は、人と人との関係の中で行われるものであり、この意味で社会人基礎力育成と共通した基盤があると強く感じている。ディスカッションも、グループワークも、与えられた課題をチームで解決していくプログラムである。学生は、自分の考えを他人に伝え、話し合い、結論を導く。人を巻き込んでチームで理解し合い前に進む。教える側は、その学生の活動を支える役割として、教え過ぎず、見守ることが大切とも感じる。進行役として支え、学生が他の学生を見て学ぶ相互啓発を促すことも大切であろう。“教えない授業”とも言われるPBL（Project-Based Learning：問題解決型授業）の考え方も取り入れ、今後、この参加型授業を改善していく意味があると考えている。

現在、今年度の授業内容を継続して実施している途中である。コミュニケーション力を育成する科目であるため、社会人基礎力育成の評価を具体的に行っていないが、今後の課題としたい。少なくとも12の能力要素の内、主体性、働きかけ力、傾聴力、柔軟性、課題発見能力、発信力の向上が感じられた。これらの要素は3つの力の内「前に踏み出す力」と「チームで働く力」に影響を与えるものと考えている。

就業力の育成には、社会人基礎力だけではなく、「基礎学力」や「専門知識」が必要である。「人間性、基本的な生活習慣」も活動の基盤になる。これらは相互に作用しながら共に成長していくものだからである。参加型授業を通じた社会人基礎力の育成が、「基礎学力」や「専門知識」修得の意欲につながり、さらにゼミや研究室で本格的に参加型授業が行われ、専門知識を学んだ上で就業力の育成につながる事が望ましい。

今回、21世紀教育テーマ科目の中で、1～2年生を中心に、参加型授業を通じた基礎力育成の試みを行った。育成の評価など今後の課題も多いが、社会人基礎力が向上し得るものと思われる。また、就業力の育成に向けて、ゼミや研究室で学ぶ前段階としてさまざまな効用があると考えている。「社会人基礎力」を育てる授業場面を今後とも検討していきたいと思う。

参考文献

- 1) 経済産業省「社会人基礎力 育成の手引き」学校法人河合塾 平成22年12月
- 2) 全国ビジネス系大学教育会議「社会人基礎力の育成とビジネス系大学教育」学文社 平成22年12月
- 3) 大阪大学教育実践センター「魅力ある授業のために2」大阪大学出版会 平成22年3月
- 4) 上杉賢士「プロジェクト・ベース学習の実践ガイド」明治図書 平成22年10月